魔法少女リリカルなのはStrikerS　～3人の最凶～

LEOPARD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～３人の最凶～

【Ｎコード】
Ｎ２９５６ＢＡ

【作者名】
ＬＥＯＰＡＲＤ

【あらすじ】
己の願いを叶えるために戦い続ける戦士たちがいた。人はそれを「仮面ライダー」と呼んでいる。ある時、３人の仮面ライダーが鏡の世界に住む異形「ミラーモンスター」を相手に戦いを繰り広げていた。だがその時、彼らは小さな赤い宝石の放つ光に飲み込まれ、気が付くと見知らぬ世界に降り立っていた。そこは魔法文化が発展した世界――ミッドチルダだった。　※元の作者である月光丸さんの許可をもらい、自分がもう一人のオリライダーを加えたリメイク作品です。

プロローグ１　三人の仮面ライダー（前書き）

どうもはじめまして。ＬＥＯＰＡＲＤと申します。

許可を取ったとはいえ初投稿なので、とてもドキドキしています。

ちなみにタグにもあったように設定上ライダーは１３人から１５人に変更されてます。

では魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～３人の最凶～、始まります！

プロローグ1　三人の仮面ライダー

ここは日本のとある町。

この一見平凡とした町の裏では“仮面ライダー”たちによる己自身の望む願いを賭けた壮絶な戦いが繰り広げられていた。

これは鏡の世界・ミラーワールドにて戦いを続けている、3人の仮面ライダーによる物語である――――

「全く、面倒な奴が現れたもんだ」

ミラーワールド内の廃ビルの中で1人、ミラーモンスターと戦っている戦士がいた。

サメのような意匠を持った水色の仮面の戦士、“仮面ライダーアビス”である。

アビスは今ミラーモンスターの一匹であるヤゴ型モンスター“シアゴースト”と戦っている最中だった。

「まずはこれだな」

アビスはサメの紋章の入ったカードデッキから一枚のカードを抜き取り、左手に装備されている召喚機“アビスバイザー”に装填する。

《ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ》

アビスバイザーから音声が鳴ると同時にどこからか大剣アビスセイバーが飛来し、アビスの右手に収まる。

「よし、いくか」

アビスセイバーを手に持ち、アビスはシアゴーストに向かって走り出す。

「おらぁっ！！」

アビスはアビスセイバーでシアゴーストを連続で切りつける。

シアゴーストも負けじと腕を振りかぶって襲い掛かるが、アビスはそれを難なく避けて、シアゴーストを蹴り飛ばす。

「増えられると面倒だ、一気に決めるか」

アビスはカードデッキから別のカードを抜き取り、アビスバイザーに装填する。

《ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ》

音声が鳴り、アビスの後ろから彼の契約モンスターである“アビスラッシャー”と“アビスハンマー”の２体が出現する。

「フッ！」

アビスは高くジャンプすると、アビスラッシャーとアビスハンマーの2体が空中のアビスに向けて高圧水流を纏わせ・・・

「ハアアアアアアアアアアッ！！！」

もの凄いスピードで、水流を纏ったドロップキックを繰り出す。これがアビスの必殺技、“アビスダイブ”である。

動きの鈍いシアゴーストがこれを対処できるはずもなく、アビスダイブを受けて爆発した。

その後、炎の中からシアゴーストの魂が小さな光となって出現し、それをアビスラッシャーが吸収した。吸収し損ねたアビスハンマーは不機嫌そうに唸り声を上げていたが。

「ふう・・・」

地面に着地したアビスが一息つく。

「さて、戻るか」

現実世界に変えるべく、近くに鏡か窓ガラスがないか探すが・・・

「まだお帰りには早いんじゃないですか？」

「！！」

どこからか誰かの声が聞こえ、アビスが声の下方向に振り返る。

すると階段からペンギンのような意匠を持った群青色仮面の戦士、“仮面ライダーコルド”が降りてきた。

「お前・・・今まで隠れてやがったな。なんで今頃になって出てきた？」

「いえ、あんな虫一匹いちいち相手にするのも面倒でしてね。どうせならアナタに排除してもらおうと思っただけですよ」

「てめぇ・・・こっちだって面倒だってのに・・・」

コルドの台詞を聞いてアビスは不機嫌になるが・・・

「「「ウッヘウッヘウッヘウッヘ」」」

「「ん？」」

二人が振り返ると、その先にはシアゴーストが大量に出現していた。

「排除してもらったつもりが、当てが外れたようですね」

「あぁもう、めんどくせぇなぁ！」

アビスが再びカードデッキからカードを抜き取ろうとしたその時・・・

「ここかぁ、祭りの場所は・・・」

声のした方向にアビスとコルドが振り返る。

そこにはコブラの意匠を持った紫色の仮面の戦士、“仮面ライダー王蛇”がいた。

「うわぁ、また更にめんどくさいのが出てきやがったなぁ」

「あのまま隠れて様子を見ているべきでしたね」

アビスは嫌そうに呟き、コルドは自分のとった行動に後悔した。

王蛇もアビスとコルドがいることに気が付く。

「あ？・・・何だ、お前らも俺を楽しませてくれるのか？」

「悪いが、お前のやることに付き合う気はねぇよ」

「アナタみたいな奴と遊ぶと、かえって危なっかしいですからね」

アビスとコルドはそれぞれ返事を返す。

「はっ、連れない奴らだなぁ・・・」

王蛇はそう言うと、コブラの紋章の入ったカードデッキからカードを抜き取り、どこからか取り出したコブラのような杖型の召喚機“ベノバイザー”に装填する。

《ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ》

音声が鳴り、王蛇の右手にベノサーベルが飛来する。王蛇はそれを左手に持ち替える。

「イライラするんだよ・・・」

王蛇は首の骨をゴキゴキと鳴らし、シアゴーストの大群に突っ込んでいく。

「あ～、本当にめんどくせっ！」

アビスもまたアビスセイバーを手に持ってシアゴーストの大群に突っ込んでいく。

「私はこのまま黙って観戦・・・させてはくれないようですね」

「「「ウッヘウッヘウッヘ」」」

気がつけばコルドの周りにも何体かシアゴーストが迫っていた。

コルドはペンギンの紋章が入ったカードデッキからカードを抜き取

り、今まで手にしていた大きな槍型の召喚機“スノウバイザー”に装填する。

《ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ》

音声が鳴ると、上空からペンギンの翼を模した2本の大剣スノウセイバーが飛来し、コルドの両手に収まる。

「永久に氷の中で眠るがいい」

そういってコルドも迫っていたシアゴーストに向けてスノウセイバーを振るう。

しかし3人は気付いていなかった。

自分達が戦っている戦場の中に、小さな赤い宝石が転がり落ちていることに――――

プロローグ１　三人の仮面ライダー（後書き）

はい。というわけで一つ目のプロローグでした。

ちなみにオリライダーのコルドの名前の由来はＣＯＬＤ（冷たい・冷酷）から来ています。

詳細は次のプロローグが終わったらキャラ設定を載せますので、そこに書きます。

では感想などをお待ちしています。

プロローグ2　異世界（前書き）

プロローグ2投稿しました。

ちなみに何故ペンギンをモデルにしたかというと、それしかいいデザインが思い浮かばなかったからですw

プロローグ2　異世界

アビスとコルドがシアゴーストの大群と対峙する中、王蛇も乱入し、戦いはさらに激化していく。

「ハッハァ！！」

王蛇はベノサーベルを振るい、シアゴーストを次々と吹き飛ばし、なぎ倒していく。

「うわぁ、あの虫共が次々と・・・まぁ、奴が数を減らしてくれるなら都合が良いな」

アビスもアビスセイバーを振るい、迫り来るシアゴーストを一体ずつ確実に倒していく。

コルドもまたスノウセイバーで、襲い掛かるシアゴーストを問題なく片付けていく。

３人が戦っているうちに、シアゴーストも３０体近くはいたのだが、いつの間にか後５体ほどに減っていた。

王蛇も痺れを切らしたのか、ベノサーベルを一旦投げ捨て、カードデッキからカード一枚抜き、ベノバイザーに装填する。

《ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ》

音声がなり、王蛇の後方から契約モンスターの“ベノスネーカー”が出現する。

「ハアアアアアアアアアアアア・・・・！！」

王蛇も地を這うようにして走り・・・

「ハァッ！！」

ベノスネーカーのいる後ろにバック宙する。そして・・・

「オラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

ベノスネーカーの放った溶解液を両足に纏い、高速の連続キック“ベノクラッシュ”を放つ。

直線上にいたシアゴースト達に見事炸裂し、一気に爆発を起こす。

「派手にやりますね。ではこちらも終わりにしますか」

コルドはそう言うと、王蛇のように両手に持っていたスノウセイバーを一旦捨ててカードデッキからカードを抜き取る。そのカードにはデッキと同じペンギンの紋章が写されていた。

《ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ》

スノウバイザーに装填し音声が鳴ると、コルドの後方に霧が立ち始め、その中からペンギン型の契約モンスター“スノウフェザード”

が出現した。
スノウフェザードは残っているシアゴーストに向けて口から冷凍光線を放ち、それに当たったシアゴーストたちは瞬時に凍り付いてしまう。

「てやっ！」

コルドは一旦捨てたスノウセイバーを再び手に持ち、地面を仰向けになりながら滑ってくるスノウフェザードの背中に飛び乗る。
そしてコルドはそのまま凍ったシアゴーストたちの傍を通りながら、スノウセイバーで次々と一刀両断していく。これがコルドの必殺技“フローズンスライサー”である。
凍ったシアゴーストたちは身動きを取ることなく、スノウセイバーの餌食となり爆発していった。

「やっと片付いたか・・・」

アビスはシアゴーストたちが全滅したことを確認すると、その場を立ち去ろうとする。

しかし・・・

「オラァッ！！」

「ッ！？」

突然王蛇がベノサーベル振るって襲い掛かってきた。

アビスは王蛇の攻撃をアビスセイバーで受け止める。

「祭りはまだ終わってないってか？浅倉（あさくら）」

「まだイライラが納まらねぇんだ・・・少しは俺を楽しませろよ、二宮（にのみや）」

そういうと王蛇は、アビスを無理やりなぎ倒す。

そしてアビスに向かってベノサーベルを振り下ろそうとするが・・・

「図に乗るなっ！！！」

「ぐおっ！？」

アビスバイザーから水の衝撃波が発射され、王蛇は怯む。

その隙にアビスは素早く起き上がり、王蛇から離れるが・・・

「ハァッ！！」

「ぐあっ！？」

突然アビスの背中に何かで切りつけられたような激痛が走る。

振り返るとスノウセイバーを手にしながらコルドが対峙していた。

「ちぃ、大野木(おおのぎ)ぃ・・・・！！」

「私も、このままサヨナラするつもりはありませんよ？」

アビスは体勢を立て直し、コルドを仮面越しから睨み付ける。

王蛇も同じく体勢を立て直し、再び構える。

「ハッハァ・・・そうだ、それでいい。そうでないと面白くない・・・！！」

「はぁ～、こっちは大迷惑なんだがなぁ・・・」

「よく無駄口をほざいてる余裕がありますね・・・」

3人は構える。

そして再び駆け出したその時・・・

―キイィィィン・・・・―

「「「！？」」」

突然謎の音が響き渡る。

3人は音のした方向へ振り返る。

そこにはあの小さな赤い宝石があった。しかし何故か点滅している。

そして急に宝石が光りだした。

「なっ――――」

「うおっ――――」

「くっ――――」

数分後・・・

その場所には誰もいなくなっていた。

アビスも、王蛇も、コルドも、あの赤い宝石も、みんな姿を消して

いた――――

「――――ん？」

アビスは目を覚まし、起き上がる。その隣には王蛇とコルドも倒れていた。

3人は今、どこかの工場跡地みたいなところにいた。

「どこだ、ここ・・・？」

アビスはVバックルからカードデッキを抜き取って変身を解除し、二宮鋭介（にのみやえいすけ）の姿に戻った。

「確か俺たち、廃ビルの中で戦っていたよな・・・」

二宮は外に出てみる。

それと同時に二宮は呆気に取られた。外には高層ビルがたくさん並んでおり、明らかに自分たちのいた平凡な町とは違っていたからだ。

「・・・どうなってんだ？」

二宮は何故自分達がここにいるのか理解できなかった。

自分はさっきまでミラーワールドで王蛇、コルドと戦っていたはず

なのだが、突然そこらに落ちていた赤い宝石が光りだしたと思ったら、いつの間にかここにいたのだ。しかも自分達がいたミラーワールド内の廃ビルで、工場跡地ではない。不思議に思うのは当然だろう。

「ん？」

二宮は足元にあの赤い宝石が落ちていることに気付き、拾い上げる。

「まさかとは思うが・・・これの所為か？」

二宮が不思議に思っている間にコルドと王蛇も起き上がった。

「あ・・・？どこだ、ここは」

「現実の世界・・・ではないようですね」

王蛇もコルドも不思議そうに周りを見渡している。そして二宮がいることに気付く。

「二宮、ここはどこですか？私達はミラーワールドにいたんじゃなかったんですか？」

「さぁな。俺だってわかんねぇよ」

二宮がそう言い返すと王蛇とコルドはその場から立ち上がり、Vバックルからデッキを抜き取って変身を解除し、浅倉威（あさくらたけし）と大野木一雄（おおのぎかずお）の姿に戻った。

「まったく、今日は本当に不愉快な日ですねぇ・・・」

「それは俺だって一緒だっての」

「お前らをつぶせば、少しはイライラが収まるかもしれないなぁ・・・」

二宮「お前のイライラを俺たちに押し付けんな」

「確かにそれはいい考えかもしれませんね」

「お前もかい・・・」

言い合っている中、大野木は二宮の持つ赤い宝石に気が付く。

「・・・その赤い宝石はなんですか？」

「あ？ああ、今ここで拾ったんだが、どうやら俺たちはこいつの所為でこの場所にいるみたいだぜ」

「はぁ？そんな宝石の所為で？・・・もう少しマシな考えは・・・」

大野木が呆れ返るような言い方で話していると・・・

―キィィィィン・・・キィィィィン・・・―

「「「！！」」」

突然頭に響く金切り音。それはつまり・・・

「モンスターか・・・」

「ちょうどいい、イライラが解消できそうだ」

「こんな見知らぬ場所にもいるんですね」

3人は近くの窓ガラスの前まで移動し、自身のカードデッキを突き出す。

すると3人の腰にVバックルが出現する。

そして変身ポーズを取り、あの台詞を叫ぶ。

「「「変身！！！」」」

カードデッキをVバックルにはめ込み、二宮はアビス、浅倉は王蛇、大野木はコルドに変身した。

アビスは左手のアビスバイザーを2回撫で、王蛇は首の骨をゴキゴ

キと鳴らし、コルドはスノウバイザーをくるくると持ち回す。

「さぁて、いくか・・・」

「面倒だが、行くしかないか」

「邪魔になるような真似はしないでくださいよ、お二人さん」

3人は窓ガラスに近づき、ミラーワールドに突入した。

プロローグ2　異世界（後書き）

コルドの変身ポーズですが、単純に腕をクロスした形のつもりです。
よければ想像してみてください。

では感想お待ちしています。

キャラ＋ライダー設定（前書き）

プロローグ１でも予告していた通り、キャラとライダーの設定です。

二宮の設定も載せようと思ったんですが、二宮のキャラ設定は月光丸さんの方にもう記載されてるので、大野木だけにしておきます。

キャラ＋ライダー設定

大野木一雄（おおのぎかずお）／仮面ライダーコルド

性別：男

年齢：３８

髪型：黒髪のミディアムショート

好き：アイス、ケーキ（どちらも種類問わず）

嫌い：クズな人間（犯罪者、ヤンキーなど）

願い：死んだ家族の蘇生

詳細：仮面ライダーコルドとして戦う男性。３人のライダーの中では最年長。職業は医者で、二宮たちの在住している町の病院に勤務している。学生の頃から武術に興味があり、医者となった後もトレーニングを日々行っている。そのため二宮や浅倉と闘い合える程、かなり腕は立つ。以前は妻と娘の３人暮らしでそれなりに幸せな暮らしを送っていたのだが、突然訪れた家族の死が原因でしばらくは悲しみに暮れていた。そんな時に神崎士郎と出会い、ライダーバトルの詳細を知り、自身も願いを叶えるために戦うことを決意。家族を生き返らせるために、どんな卑劣な手段も使ってでも戦いに生き残ろうとしている。だが医者という職業上、二宮たちと違って人＝患者の命を助けるという使命はライダーになっても守っている。なのでヤンキーや犯罪者といったクズな人間を主にモンスターの餌としている。仮に悪人を治療しても、隙を見てモンスターに襲わせて

いる。それでも自分の願い達成にとって邪魔になりそうな相手は人間であってもライダーであっても全く容赦しない。時と場合によっては善人を餌にすることも。コルドに変身した際はスノウバイザーを回転させる癖があり、敵を倒したり殺したりする場合は“凍れ”、“永年に眠れ”と口走る。二宮と同じく現在一人暮らし。
レリックによる次元転移で同じライダーである二宮、浅倉とともにミッドチルダに漂流する。

仮面ライダーコルド

大野木一雄が変身する仮面ライダー。ペンギンのモンスターと契約している。カードデッキは群青色。顔の部分はペンギンの頭、肩のパーツは翼、胸部の鎧は胴体と足をイメージさせた意匠を持っている。それ以外はアビスや王蛇と同じスペックを保っている他、実力も2人と同等なレベルを誇る。
手に持つ大きな槍型の召喚機“スノウバイザー”にカードを装填することで、各カードの持つ力を駆使することができる他、武器そのものとしても有効に使うことも可能。ちなみにカードを装填させる場所は槍の下のほうに装備されてある。

スノウフェザード

コルドが契約したペンギン型のミラーモンスター。召喚する時は霧が立ち、その中から出現する。基本仰向けになって滑りながら移動する。氷のない場所でも、まるで氷の上を滑っているかのように素早く動きまわることができる。ただし二足歩行による移動はあまり

早くない。両腕には鋭利な刃物が装備されてあり、口からは冷凍光線や氷の塊を発射することができる。アドベントでは、立ちながら敵に向けて冷凍光線を放つ。
嘴(くちばし)が鋭く、コンクリートにも容易く穴を開けてしまう。人間を襲う際はその嘴で体を貫いて命を奪い、捕食する。
ＡＰ５０００。

ソードベント

スノウフェザードの両腕を模した大剣“スノウセイバー”を2本召喚する。かなりの大きさだが、コルドは軽々と操っている。
ＡＰ３０００。

ストライクベント

コルドの頭部の形をした武器“スノウクロー”を召喚する。左手に装備し、発射口から鋭利に尖った氷の塊を勢いよく飛ばす。アビスと同じく攻撃は単体で行う。
ＡＰ３０００。

ファイナルベント

止めを刺すときに使用するカード。スノウフェザードが冷凍光線を放ち、相手を凍らせる。その後コルドがスノウフェザードの背中に

飛び乗り、スノウセイバーで凍った相手を一刀両断する“フローズンスライサー”を発動する。
ＡＰ５０００。

ストーリーが進み次第、更新する予定です。

キャラ＋ライダー設定（後書き）

コルドのイメージ図がはっきりしなくてすみません。

ちなみに大野木が勤務している病院は龍騎の原作の１０話で北岡に依頼した女の子のお母さんが入院していた病院のつもりです。

第一話　エンカウント（前書き）

ようやく本編です。

第一話　エンカウント

アビス・王蛇・コルドの3人がミラーワールドに突入してから数分後・・・

「ねぇ、フェイトちゃん。ここだよね、次元震が発生した場所って・・・」

「うん、そのはずなんだけど・・・」

先ほどまで二宮たちがいたミッドチルダの工場跡地に二人の女性が来て、何かを調査している。

二人のうちの一人はこの世界を中心に組織された、時空管理局のひとつ機動六課に所属するスターズの隊長である高町なのは、もう一人は同じく機動六課所属のライトニングの隊長、フェイト・T・ハラオウンである。

現在二人は工場跡地で次元震が発生したという情報を聞き、ここまで飛んできたのだ。

しかし、二人が工場跡地に来ても、そこには何もなかった。現にこの場所に漂流した人物達はとっくにどこかへ行ってしまったということは当然ながら二人が知るわけもない。

「何も無いね」

「ううん、ひょっとしたら何かあるかもしれない。もう少し調べてみよう」

「うん、わかった」

二人が調査を再開しようとしたその時、突然通信が入った。

「はい、こちらなのｈ『なのはさん！大変です！』ス、スバル！？どうしたのそんなに慌てて・・・」

通信した相手はなのはと同じくスターズのメンバーで、自分の教え子の一人でもあるスバル・ナカジマであった。

『今さっき全てのガジェットを倒し終えたんですけど、突然建物の窓から大きなクモが現れたんです！」

「窓から大きなクモが！？」

『襲ってきたので反撃したんですが、全く歯が立たないんです。だからこっちまで応援に・・ティア！！』

通信の途中でスバルが大声を上げる。

「どうしたのスバル！？」

『ティアがクモに捕まったんです！なのはさん早く来てください！それまで私も頑張りますから！！』

「わかったよ、今すぐそっちへ行くね！」
なのはは通信を切ると、ふわりと浮かび上がる。
「フェイトちゃん、スバルたちが危ないみたいなの。私応援に行ってくるね！！」
「うん、私もすぐに行くから！」
そういうとなのははかなりのスピードでその場から飛び去っていった。
しかし、まさかなのはが到着した頃には、その応援が無駄になるということは思いつきもしなかった。

時はスバルがなのはに通信を入れる数十分前に遡る・・・
「ギシャアアアアア！！」
「うおっ！？」
「ちっ、イラつかせる・・・！！」
「虫の分際で、抵抗しないでもらいたいね！」
ミラーワールドに突入したアビスたちは、クモ型のミラーモンスタ

ー“ディスパイダー”と戦っていた。

しかしディスパイダーは前足を使って攻撃したり、クモの糸を吐いたりして三人をてこずらせていた。

「ホントにめんどくさい奴が現れたよな・・・おっと!!」

アビスはディスパイダーの攻撃を避け、その場から大きく離れる。

そしてある程度離れた後、カードデッキから一枚のカードを抜き取り、アビスバイザーに装填する。

《ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ》

アビスの右手に、アビスラッシャーの頭部を模した手甲アビスクローが装着された。

「ハァッ!!」

そしてアビスクローをディスパイダーに向けて、高圧水流を発射する。

ディスパイダーはその水流に弾き飛ばされ、大きくひっくり返った。

「邪魔をするな。こいつは俺の獲物だ」

「あなたの獲物だといつ決まったんですか?」

「早い者勝ちなんだよ」

こんな時でも3人は言い合う余裕があるらしい。

しかしそうしている間にディスパイダーは起き上がり、ビルの壁を登り何処かへ逃げ出した。

「ちっ、逃げる気か！？」

「逃がすかよ・・・！！」

3人はディスパイダーの後を追った。

一方、ミッドチルダの街中でも、とある戦いが繰り広げられていた。

「スバル、一気に決めるわよ！！」

「うん！！」

機動六課のスターズ3であり、物語の冒頭あたりで声だけ登場したスバル・ナカジマと、同じくスターズ4のティアナ・ランスターの二人が、機械兵器のガジェット相手に戦っている。

迫り来るガジェットをスバルがマッハキャリバーで殴り飛ばし、離れたところからティアナが遠距離にいるガジェットをクロスミラージュで打ち落とす。

二人の奮闘もあって、ガジェットも残り後一機になった。

「これで・・・最後っ！！」

そして最後の一機をスバルが破壊し、ガジェットは全滅した。

「ふう、やっと片付いたね」

「そうね。さっさと戻りましょ」

スバル「うん！」

2人が移動しようとしたその時・・・

―キュイイイイン―

「ギシャアアアアアアアア！！」

「「！？」」

突然ビルの窓ガラスの中から、逃げ出したディスパイダーが出現した。

「な、何よこいつ！？」

「うわわわ！！　ク、クモ！？」

ディスパイダーの出現に慌てる2人だが、ディスパイダーはそんな事もお構いなしに2人に攻撃を仕掛けてきた。

「うわぁっ！？攻撃してきた！？」

「くっ、いきなり何なの！？　スバル、こうなったらコイツも倒すわよ！！」

「えぇっ、戦うの！？　だってクモだよ！？」

「あぁもう、グチグチ言わない！！　いくわよ！！」

2人は焦りながらも、ディスパイダーに攻撃を仕掛ける。

「クロスファイアー・・・シュート！！」

ティアナがディスパイダーを狙い撃つが・・・

「ギシャアアアアア！！」

（ッ！？　あまり効いてない！？）

ディスパイダーはあまりダメージを受けていなかった。それもそのはず、ディスパイダーは元々ミッドチルダとは別の世界に住むモンスターだ。ましてやライダーによる攻撃しか手応えが無いモンスター相手にスバルたちの攻撃などあまり効果が無いのも無理はない。

「まずいわね・・・スバル、なのはさんに応援に来るように知らせて！！」

「わかった！！」

ティアナにそう言われ、スバルはなのはに通信を入れる。

だが、その隙をディスパイダーは見逃さない。口から糸を吐いて、ティアナを捕まえる。

「キャアッ！？」

「ティア！？」

気が付いた時には遅く、糸に絡まったティアナは下に落下する。

そこにディスパイダーがゆっくりと迫る。

「（うそ・・・このままじゃ私、食べられる！？）いや、来ないで・・・！！」

ティアナは必死にもがくが、糸は全く千切れない。

「ティアを離せ！！」

通信を終えたスバルがディスパイダーに突撃するが・・・

「ギシャアアアアッ！！」

「キャアッ！！」

ディスパイダーに弾かれ、吹き飛ばされてしまう。

ついにディスパイダーはティアナの目の前まで来た。

「ティアッ！！！」

もう間に合わない。

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

そしてティアナが食べられそうになったその時・・・

―キュイイイイイン―

ビルの窓ガラスから三台のライドシューターが飛び出し・・・

「ギシャアアアアアッ！！？」

そのうちの一台がディスパイダーを跳ね飛ばした。

三台のライドシューターはスバルの近くに止まる。

「「――――――――えっ？」」

スバルもティアナも呆気にとられた。

「ーーーやれやれ、左手がこんなんだから運転が不便だな」

「ハッ、今に始まったことじゃないだろ」

「まったくですね」

ライドシューターの中から、アビス・王蛇・コルドの三人が出てきた。

そして、ディスパイダーに言い放つ。

「さぁ、祭りの続きをしようか・・・・!!」

「お前も沈めてやろうか・・・・?」

「そろそろ眠ってもらいますよ・・・・」

最凶最悪の仮面ライダーが三人、ミッドチルダに参上した。

第一話　エンカウント（後書き）

ミラーモンスター以外はセリフに名前を入れるようにしてましたが、なんだか読みにくそうなので名前を入れるのはやめておきます。

第二話　保護（前書き）

二話でいきなり長くなりました。

それではどうぞw

第二話　保護

スバルとティアナは未だ今の状況が理解できていない。

なにしろガジェットを全滅させ戻ろうとした矢先に、突然巨大なクモがビルの窓ガラスから出現したと思えば、今度はバイクらしき乗り物が現れ、中から仮面を被った謎の人物達が出てきたのだから。

「あ・・・あなたたちは一体？」

「うん？」

おそるおそる聞いてみたスバルの声にコルドが反応し、後ろにいるスバルたちの方に振り返る。

「悪いですが、今は名乗ってる暇はな、い・・・？」

コルドは話しかけてきた人物の衣服を見て、一瞬呆然とした。

二人の衣服はコルドから見れば、まるで何処かのアニメ番組にでも出てきそうな衣装だったからだ。

もっとも普段からこんな衣装で街を出歩いているわけではないのだが。

「ん？誰と話してんだ、大野ｇ・・・おいおい、ここは秋〇原かどっかかよ？」

「あ？・・・何だぁ、お前らぁ？」

コルドが誰かと話しているのに気付いたアビスと王蛇も二人の方を見て、呆気に取られながらも口を動かず。

「まぁ、この際服装はどうでもいいでしょう・・・」

そう言うとコルドはスノウセイバーでティアナに絡まっている糸を切り裂いて、ティアナの自由を開放させる。

「さっさと逃げてください。まだ虫の排除が済んでないですからね・・・」

「ギシャアアアアアアアアアっ！！」

コルドの台詞にアビスたちは再びディスパイダーの方へと振り向きなおす。

ディスパイダーは先ほどのライドシュータによる激突の所為で若干ふらついていたが、すぐに体勢を立て直しアビスたちに向けて威嚇の鳴き声を上げる。

その鳴き声にスバルとティアナはびくっと身を震えさせるが、アビスたちは慣れているのか全く動じない。正直これくらいのことでいちいち驚いていたら、ライダーなどやってられないだろう。

「そんなに吠えるな・・・今相手をしてやるよ」

「ま、待ってください！まさか戦うつもりなんですか！？かなり強いですよ、あのクモは！」

王蛇の言動にティアナが慌てて忠告する。

「かなり強いって・・・まさかお前ら、あいつと戦ったのか？」

「は、はい。全然歯が立ちませんでしたけど・・・」

「それでよく生きてられましたね・・・しかしご心配無く。ああいうのと戦うのは慣れていいるんですよ、我々は」

“慣れている”という言葉を聞いてスバルとティアナは目を丸くした。そんな二人を他所にアビスたちはディスパイダーの方へと駆け出す。

ディスパイダーはアビスたちを捕まえようと糸を放つ。

「フッ！　ハッ！」

しかしそれをスノウセイバーを手にしたコルドが放った糸を次々と微塵に切り落としていく。

「これ以上長引くのは面倒だ。さっさと終わらせるか！」

アビスはそう言ってデッキからカードを一枚抜き出して、アビスバイザーに装填する。

《ＡＤ　ＶＥＮＴ》

「「グオオオオオオオオオオっ！！！！！」」

「ええっ！？」

「今度はサメが出てきた！？」

別のモンスターであるアビスラッシャーとアビスハンマーがアビスの後方に現れたことに対し、スバルたちは驚く。

アビスラッシャーは高圧水流を、アビスハンマーは胸のバルカン砲から発射される爆撃をディスパイダーへと放つ。

「ギシャアアアアッ！？」

攻撃が直撃し、その衝撃でディスパイダーの前足が1本折れてしまった。

このまま戦うのは不利と察知したのか、ディスパイダーは慌てながらビルの方へと向きを変える。おそらくミラーワールドに逃げるつもりだ。

「往生際の悪い・・・！」

コルドがスノウバイザーに再び手にし、一枚のカードを装填。

《ＡＤ　ＶＥＮＴ》

「ケエエエエエエエェェェェンッ！！」

霧の中からスノウフェザードが現れ、冷凍光線をディスパイダー目掛けて放った。

攻撃に当たったディスパイダーの前足、下半身が凍って上手く身動

きが取れなくなった。

「どいつもこいつも・・・こいつは俺の獲物だと言ったはずだ・・・！」

さっきから好き勝手やっている二人に更なる苛立ちを起こしながらも、王蛇もカードをベノバイザーに装填した。

《ＡＤ　ＶＥＮＴ》

「ギュアアアアアアアアアアアッ！！」

召喚されたベノスネーカーは未だに抵抗しているディスパイダーに向けて口から溶解液を発射する。

まともに溶解液を浴びたディスパイダーは苦しそうに激しくもがく。

「そろそろ排除しますか・・・！！」

《ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ》

コルドがカードをスノウバイザーに装填させ、スノウフェザードにディスパイダーを完全に凍らせる。そしてそのまま背中に飛び乗り、滑っていく。

それを見たアビスと王蛇も、カードを抜き取り自分のバイザーに装填させる。

《《ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ》》

「「ハァッ！！」」

アビスと王蛇は同時に飛び上がる。

「でやぁッ！！」

その間にコルドはスノウセイバーで、ディスパイダーを真っ二つに切り裂いて・・・

「「ハアアアアアアアアアアッ！！！」」

その切り裂かれた2つの残骸にアビスダイブとベノクラッシュが炸裂し、大爆発を起こす。

「「す、すごい・・・」」

アビス・王蛇・コルドの3人よる戦いを眺めていたスバルとティアナは愕然としていた。

「それにしても、一体何者なのかしらあの3人・・・？」

「う～ん、わかんない。でも3人共すごく強いなぁ～」

ティアナはアビスたちのことを疑問に思い、スバルはアビスたちの戦いに目を輝かせていた。

「お前ら、俺の獲物を横取りするな・・・！！」

「別に横取りしたつもりはありませんでしたがね。」

不機嫌な王蛇に対して、コルドはしらっとした態度を取る。ちなみに三人はまだ変身を解除していない状態だ。

「それで・・・これからどうするつもりですか、二宮？」

「この街は明らかに俺たちの知っている街じゃない。とりあえず、ここが何処なのかを把握したほうがいいだろう・・・」

コルドとアビスはこれからどうするかについて話し合っていた。

するとそこへ・・・

「動かないで！！」

「「「あ？」」」

スバルたちとは違う女性の声がして、３人は振り返る。

視線の先には通信を受けて、たった今到着したなのはが上空にいた。生身の女性が宙に浮いていることに、さすがのアビスたちも驚いていた。

「時空管理局機動六課スターズ分隊隊長の高町なのはです。今すぐ武装を解除し、投降してください」

なのははそう3人に言い放つ。しかし・・・

「何なんだお前・・・時空管理局？機動六課？」

「言ってる意味が分からん・・・それになんだぁ、そのコスプレは？」

「しかも空を飛んでいるし・・・この街の人間はどうなってるんですか・・・？」

3人はもう何がどうなってるのか、さっぱり分からないでいた。しかしそれはなのはにとっても同じことだろう。

通信を受けて目的地に着いたものの、クモらしき生物は既に片付けられていて、代わりに見たことない仮面の人物が3人もいるのだから警戒するのも当たり前である。

「あっあの！　待ってくださいなのはさん！」

そこへスバルが慌てて間に割って入る。

「スバル！？危ないからその人たちから離れて！！」

「違うんです！！この三人が私達をクモから助けてくれたんです！！」

「えっ、そうだったの？」

なのはは驚く。そしてとりあえずこの3人が敵ではないことを知り、アビスたちのほうへ向くとすぐに謝罪した。

「勘違いして申し訳ありませんでした。二人を助けてくれたことに感謝します」

「助けた？・・・違うな。俺たちはただあのクモが目障りだったから潰そうとしただけだ・・・」

「でも私を助けてくれたじゃないですか」

「勘違いしないでください。戦うのに邪魔になりそうだったからやっただけですよ」

王蛇とコルドが言う中、アビスは一人考え込んでいた。

（コイツら、この街について詳しいみたいだな。だとしたらこのままコイツらに大人しく従ったほうが案外得策かもしれんな・・・）

「あの、あなたたちについて幾つか聞きたい事があります。よろしければご同行お願いできませんか？」

なのはアビスたちについてくるようにお願いする。

「何だと？　何故見ず知らずの人間について行かなきゃならん？」

王蛇はついて行くことに不満を感じている。だが・・・

「・・・いや、ついて行こう」

「・・・そうですね。このままでは路頭に迷いそうですし」

「・・・何？」

アビスとコルドはついて行くことを承知し、そんな2人の言葉に王蛇は驚いた。

「ご協力ありがとうございます。では私達について来てください」

なのははそう言うとヘリのある場所へと案内する。王蛇は気付かれないようにアビスに呟く。

「二宮、大野木・・・何を考えている？」

「大丈夫だ。ちゃんと考えてはいる。それに・・・」

アビスも小声で二人にだけ聞こえるように囁く。

「使えるものは、有効に使ったほうがいいだろ・・・？」

「・・・ちっ！」

そういってアビスとコルドはなのはたちの後に続く。王蛇も不満ではあるが、一人では同行できる立場ではないので渋々ながらついて行くことにした。

こうして彼らは、不本意ながらも六課の関わることになるのだった。

第二話　保護（後書き）

三人同時のファイナルベントはさすがに派手すぎたかな・・・？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2956ba/

魔法少女リリカルなのはStrikerS　～3人の最凶～

2012年1月12日00時52分発行